

藤田郁代 シリーズ監修 半田理恵子, 藤田郁代 編

《標準言語聴覚障害学》

地域言語聴覚療法学

長谷川幹 (三軒茶屋内科リハビリテーションクリニック)

脳卒中などを発症すると入院し、障害が残ったまま退院する。そこで、地域でのさまざまな医療・福祉関係者がチームを組んで障害のある人の支援をすることになる。

子供の病気は発達障害、周産期の障害など幅広くあるが、子供を専門に診ているリハビリテーション病院は公立などに限定されていることが多い。教育も絡み、地域に生活している障害のある子に十分な対応ができていないとはいえないのが現状である。

また、超高齢社会に突入し、嚥下障害の高齢者が多くなり、その対応も重要である。

このように小児から高齢者、さまざまな疾患による障害のある人に対する地域の体制づくりが大きな課題である。

こうしたなかで、本書が登場したのは時宜にかなっている。言語聴覚士が国家資格になってまだ約20年という歴史から、地域で活動している言語聴覚士は少ないため、編集者の序で、「先例となるテキストや理論が存在しないため、執筆者はご自分の経験を頼りに荒野を耕すような思いで一字一句を生み出されたことと思う」と述べている。そのような思いを込めて挑戦している姿が思い浮かぶような本である。

第1章の「社会的背景と意義」では、第一次大戦以降のリハビリテーションの歴史、わが国における高齢者～小児の社会保障制度の変遷などを大局的に述べ、第2章以降につなげている。

第2章の「成人・高齢者の地域生活を支える」で

は、求められる地域言語聴覚療法に関して、地域包括ケア、医療、介護などのシステムと制度以外にインフォーマル支援に着目している。地域で言語聴覚療法をする際の情報収集と評価、支援計画などを基礎として、具体的な地域での介護予防、通所、在宅、介護老人保健施設などの場での言語聴覚療法について、そして、失語症、高次脳機能障害、神経難病、がん、吃音などのある人への地域での言語聴覚療法について、幅広く述べている。

第3章の「小児の地域生活を支える」では、発達、教育の視点で乳幼児、通所、就学後、特別支援教育、重症心身障害児について、支援のシステム、他の職種との動きと言語聴覚士の役割、動きを詳細に述べている。

第4章では最近組織化された災害時へのリハビリテーション体制と言語聴覚士の役割、第5章でコミュニケーション機器について述べている。

このように地域での言語聴覚士の活動の場は極めて広く、評者も学ぶ点が多かった。歴史的にみてまだ未成熟な部分が多く、若い世代もこれを機に地域で挑戦し障害のある人とともに課題を解決していこうとすれば、言語聴覚士の活躍する場面が拡がりその内容が深化すると思う。言語聴覚士のみならず関連職種、学生などにぜひ読んでいただきたい本である。

(B5 頁232 2019年 定価：本体4,000円＋税 [ISBN978-4-260-03637-5] 医学書院刊)